

かりアゴを出して動けなくなっていました。彼はふだんは酒を飲まないところへ、特別強いチャンを飲まれたうえの強行軍ですから、参るのは当然です。どうもコックの奴が「最後にシゴイテやれ」と、地理に明るいのを幸い引き回した感じです。やっとのことでゴダワリの植物園についたのが午後8時。レレからこんなにかかるはずはないのです。先行した人夫の手配でジープが来ており、9時すぎに家へ帰りつきました。

今回の出費は、人夫賃は別で一人当り70ル

ピー(2520円)だそうです。これは帳面づらに出た金額を二等分したもので、本当はB君がかなり背負い込んでいるはずですが、もっとも僕の出張費は全額B君に預けてあり、そもそも役所からいくらもらったの知りません。精算してお釣りをもらったわけではないので、赤字か黒字かもわかりません。僕自身は途中でチャンに1ルピー(36円)使っただけでした。

(金井弘夫 Hiroo KANAI)

新刊

□濱田 仁：接合藻の生物学 264pp. 1990. 私費出版(〒939-03 富山県射水郡小杉町南太閤山9-44. 電話0766-56-6658). ¥2,200.

著者が永年研究対象としてきた単細胞性の接合藻ミカツキモが中心であるが、糸状のアオミドロをはじめ他の接合藻も登場して接合藻の全体像が解説される。第1章の採集と観察の方法から始まり、2. 培養の方法、3. 生育環境、4. 環境汚染の指標生物としての接合藻、5. 形態と細胞構造及び分類、6. 接合藻への放射線の影響、7. 無性生殖と有性生殖、8. 生活環と核相、9. 遺伝、の計9章より成り、巻末に名前とその由来及び用語の解説が添えられる。3章と4章は著者が日頃深い関心をもって進めてきた調査結果を中心に論議が進められ、最近の環境汚染の問題を考える上で示唆に富む内容となっている。8章は著者が最も力を注いだ部分と思われ、培養と藻体のDNA量の測定等の著者自身の研究結果から、ミカツキモやアオミドロなどの接合藻の栄養体の核相は従来考えられているように半数ではなく、倍数であると結論し、さらにDNA量から生活環の各ステージの核相の類推を進めている。ミカツキモやアオミドロは広く親しまれた名の藻であるが、それらの生物学的全体像を扱った類書はなかった。本書の刊行が歓迎されるゆえんである。なお目次と本文の標題の一致しない箇所が幾つか見られる。次版での改定を望みたい。(千原光雄)

□Kramer K.U. and Green P.S. (eds.): Kubitzki K. (ed.) *The Families and Genera of Vascular Plants Volume I. Pteridophytes and Gymnosperms.* i-xiv+404pp+216 figs. 1990. Springer-Verlag, Wien.

近年における植物分類学の知見の増大は目ざましい。それにもかかわらず、というべきか、だから、というべきか、維管束植物の分類体系を包括的にまとめるのは大変困難なことである。この難かしさを克服しようとし、分類体系の現状を総覧し、この分野における研究のさらなる活性化を目指して編纂された大著の第1冊がやっと出版された。やっと、というのは、私が依頼を受けてコケシノブ科の原稿を送ったのはもう何年か前になるからである。

近年の研究成果を網羅したという当然ともいえる唱い文句にもかかわらず、でき上りについては首をひねりたくなるところがある。科の配列は、それぞれの高次分類群ごとにアルファベット順とされた。系統関係が分かっていない科の間の関係に予断を与えないため、という理由づけはそれなりに1つの理屈ではあるのだが、それにしては科の設定の仕方が何とも大胆なのである。この種の体系の整理は、どちらかという保守的な範囲づけで解説された方がよいと私は思っているが、左程の根拠も示されないままに、勝手な科の範囲の設定をするのは、どうせ客観的な根拠はないから、という開き直りなのだろうか。確かに、保守的に